

伝えたい言葉の力

福島県会津坂下町立坂下中学校

三年 須佐 遥

「こんにちは、お昼のニュースをお伝えします」

私は将来、アナウンサーになりたいという夢を持っている。その気持ちが大きく膨らんだのは、あるオーディションに合格してドラマに出演したことがきっかけだ。オーディションに集まった子ども達は、テレビや雑誌で活躍している個性的な人ばかりで、初めて踏み込んだ世界にワクワクしながらも、この中で最後まで残れるか不安だった。

自分自身の「良さ」や「個性」を分かってもらうには、どうしたらよいのか…。会場の熱気の中で必死に考えた。私の良さは、明るさ、元気さ。人を楽しませるのも好き。…とにかく、飾らない自分を見てもらおうと思いを胸に決めた。また、地方出身だからこそ「なまり」も、個性の一つだ、思い切っ

「このセリフ、会津弁で言ってみて。」

「んだな…そうすんべ。」

すかさず上がる笑い声。よし、ウケたぞ。次は、得意なものまねもやってみよう。そして、次は…。

審査の方の優しい笑顔に触れ、コンプレックスを感じることなくリラックスして臨むことができた、不思議な時間を過ごした。

ところが、最終審査に通りたいよ撮影が始まるうという時に、あの「東日本大震災」が起こってしまった。連日、テレビで目にする悲惨な現状。家族や大切な人の行方が分からないままの人。住む家を失い、学校どころか、生きるだけで必死な人たち。「自分は今、こんなことをしていて良いのだろうか。…」心は揺れた。

小学生なりに、何度も何度も悩んだ結果、撮影に参加することを決めた。皆に何かを伝えることで、苦しんでいる人たちが笑顔を取り戻すための役に立てないだろうか、そう思ったからだ。

ちなみに、オーディションで武器となった「なまり」は、ドラマ撮影本番のセリフの一言目から厳しい指摘を受けた。基本である、「正しい共通語」を身につけることの大切さを痛感した。「基本あってこそその個性」なのだと、今でも肝に銘じている。

約三カ月間の撮影。出演者・スタッフの皆で一つの大きな作品を作り上げる努力は想像を超えるものだった。しかし、それにも増して、この体験を通して感じ得た「充実感や感動」は私にとって、何事にも代えがたい「最高の心の宝物」となって刻まれた。

ただし、私たちが精一杯に取り組んだとしても、それを聞く側、観る側の考え方やとらえ方によって、深く心が傷つけられていたり、不愉快に感じられたり、または批判的に受け止められたりすることもあった。反対に、一つの言葉が、人の命を救ったり、生きる力になったりする、次のようなこともあったのだ。ドラマの内容と同じような境遇を持った方から、「長い間、友人関係や学校生活に不安を抱え、身動きできずに立ち止まっていたが、このドラマの影響を受け、勇気を出して周りの人と話してみることで、自分の殻をやぶって飛び出す大きなきっかけになった。」という話をドラマの放送後に聞いた。

メディアの持つ、底知れない力を感じた。まさに両刃の剣。東日本大震災後の混乱という極限状況の中だからこそなおさら、人に何かを伝えることが持ち得るすばらしさ、そして逆に、難しさ・怖さについても深く考える機会を持つことができた。私はこのことを通して、アナウンサーになりたいと思うようになっていた。

その夢を叶えるために、今の私がやるべきことはたくさんある。もっとたくさんの方に興味を持って見聞きし、その意味を考えたい。もっと、たくさん感動を体験して、心を豊かにしたい。人に何かを伝えるための基本を、もっと貪欲に学び、身につけたい。私の持ち味は、誰にも負けない明るさと元気、そして、好奇心とあきらめない心。さらに、ちょっと他から引かれるほどのテンションの高さ。臆することなく、伸ばしていきたいと思う。

そしてできれば、ジャーナリズムの分野まで手を広げ、形ある「真実」は勿論、形のない「愛と希望」までも、私の言葉の一語一語で、表情の一つ一つで、人の心に届けられる。そんなアナウンサーになりたいと思う、きつとなってみせる。